

[山水展によせて]

日月と山水を描いた屏風

—中世日本の理想郷—

近鉄長野線・南海高野線の河内長野駅からバスで二十分、大阪平野が和泉山脈にぶつかる山裾に、真言宗の古刹・金剛寺があります。ここは東西高野街道の合流点からやや外れた場所にあり、女人禁制であった高野山に参詣できない女性の信仰を集めた「女人高野」として知られています。鬱蒼たる古木に囲まれた伽藍は、その称に恥じない真言道場の風格をたたえています。この金剛寺に所蔵される「日月山水図屏風」(六曲一雙・重要文化財)は、これまで数多くの研究者を魅了してやまない中世絵画の傑作です。ところが、その主題や絵師あるいは制作年代について諸説提出されているものの、いずれも決定的なものではなく謎は深まるばかり、というのが現状です。

画面(図)は六曲一雙の右隻に春夏の季節と太陽を、左隻に秋冬と月を描いています。通常、屏風に四季を配する場合、右から左へ春夏秋冬を順番に並列させるのですが、本屏風は中央に広がる海を取り巻くように山を描き、右隻第一・二扇上部に春(桜花咲く山)、右隻第一～六扇下部および左隻第一～六扇下部を夏(緑色の山や松原)、左隻第六～三扇上部を秋(色づいた山)、左隻第四～一扇上部を冬(雪山)として、循環的に四季を配置している点が特異です。こ

(図)「日月山水図屏風」(金剛寺蔵)



れに中国古代以来の四方四季の概念を当てはめると、六曲一雙の画面下部(手前)が南(夏)、上部(奥)が北(冬)、向かって右手が東(春)、左手が西(秋)という方向軸が設定されているとも考えられます。このような四方四季の構成は、わが国では高松塚古墳の壁画や平等院鳳凰堂の扉絵に見られるもので、本屏風の思想的根源はきわめて古いことになり、そこには来世や浄土といった場所が想定されているように思われます。そして、こうした四季と方角の構成と日月を照らし合わせるならば、東の太陽は朝を、西に傾く月は夜をそれぞれ暗示し、完結した一画面の中で朝晩の時間性をも象徴しています。このような日月を描いた屏風は南北朝から室町の遺品が数点残っており、現存最古のものとして、南北朝時代の応安三年(1370)頃に制作されたとみられる「十界図屏風」(當麻寺奥院蔵)があります。この屏風は、六曲一雙の画面に右から六道を描き、左端に当麻曼荼羅を配して地獄から極楽に至る十の世界を描いたものですが、右隻右端には金の日輪が、左隻左端には銀の月輪があらわされています。日月それぞれの下にある色紙形の内容から、太陽は人間の罪障を消し去る仏の光を、西へ傾く月は西方浄土を示すものであることがわかります。つまり、屏

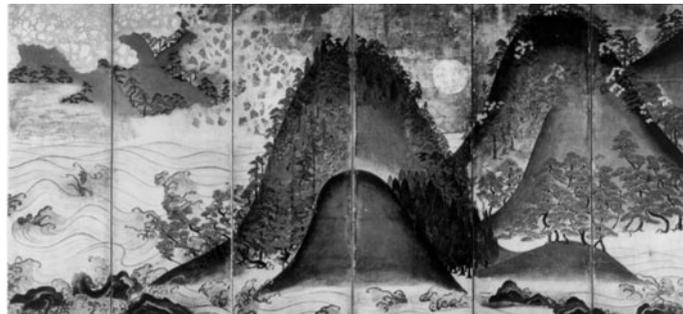
風の日月は、仏や浄土を象徴する仏教的意味が存在することになります。また、日月は「十界図屏風」のなかで左右両隻が一双の対になることを視覚的に理解させる機能をも果たしています。

次に、「日月山水図屏風」に描かれたモチーフに目をやると、最も興味深いのは右隻に描かれた山だろうと思います。放物線のように、また釣鐘のようにこんもりと盛り上がり、広葉樹や針葉樹などさまざまな樹木が描きこまれています。こうした特異な形態を持った山は、たとえば中国の桂林などには見られるものであり、水墨画の屹立する山岳とも一脈通じるものの、決してわが国に一般にみられる山の形ではありません。しかし豊かな緑と見上げるような高さの表現は、われわれが観念として持っている山に対する畏敬の念のようなものとどこか通じるのが不思議なところですが。実はこの山によく似た表現が垂迹画に見られます。「山王宮曼荼羅」(奈良国立博物館蔵)は、近江・日吉社の社頭とその御神体である八王子山を描いた南北朝頃の作例ですが、山はやはり釣鐘形で、実際の八王子山よりもかなり高さが強調されています。一方、本屏風の左隻に見られる雪山も独特の表現です。緑と白を横縞のように重ね、常緑樹の山に雪が積もった様子を表現しています。こうした表現は、やまと絵における雪山表現としてしばしば見られるものですが、たとえば、先述「山王宮曼荼羅」にも雪の比良山の表現として見られ、また「春日権現験記絵巻」(宮内庁三の丸尚蔵館蔵)第十九巻には、春日山の雪景としてでています。

すなわち、本屏風の釣鐘形の山や、緑と白の縞で表現された雪山は、いずれも「神の山」とでも称すべきものの系譜の上にあるように思われます。

さて、四方四季の構成をもつ本屏風が、古代から中世の庭園と似ている、という指摘があります。平安期の造園理論書には四方に四季の植栽を配ることが吉祥であることが説かれていますし、たとえば藤原頼通の高陽院庭園がこのような構成をもっていたこと、奥州平泉の毛越寺庭園に代表される浄土式庭園も同様のものであることが挙げられます。たしかに、こうした庭園の比較から本屏風を改めて見たとき、釣鐘形の山の樹木は自然木の描写というよりは、むしろ人工的に植えたような整然たる趣を持っていますし、左隻の州浜上の、まるで踊るかのように屈曲する浜松も、盆栽を思わせるものがあります。さらに言えば、本屏風には一人の人物も、一匹の禽獣も描かれておらず、人間の営みのある風景を描いたものと言うよりは、室内から庭園を眺めたかのごとき箱庭的空氣が存在しています。

このように、一見、人工的でありながら、そこに神や仏の存在を暗示する構成やモチーフを持ち、超現実的で人知を超えるものに管理された空間、というのが本屏風の魅力の源泉と思われる。そこには、仙境・桃源郷・浄土・霊場といったさまざまな感覚を投入できる世界が存在しています。その制作動機や年代等については今後の検討を待ちたいと思いますが、ここに中世日本の「理想郷」とでも称すべきものが表現されていることだけは確かだろうと思います。(高岸輝)



季刊 美のたより No.150

平成17年4月1日

発行 大和文華館